

### 3 縄文時代晩期終末の問題について

市の川右岸の標高約50mの台地肩部から出土した縄文時代終末期の土器群は、1号墳を中心とした500㎡程の狭い範囲に集中しており、他のこの時期の遺跡同様遺構は検出されていない。本遺跡の上流約1kmには、やはり浮線網状文土器が発見された嵐山町花見堂遺跡（金井塚他1976）が所在し、距離的にも近く、立地等も類似している。両遺跡の周辺には類似した地形が広がっており、今後、該期の遺跡が増加していく可能性もあり、興味のある地域である。

本遺跡出土の浮線網状文土器は、いわゆる千網式土器（藺田1950他）であり、千網谷戸遺跡出土土器とは若干の相違は見られるが、浅鉢形土器の口縁内面の沈線や浮線結合部の点刻等から千網Ⅰ式でも新段階のものと考えられる。花見堂遺跡とも時期的には大差はないものと思われるが、焼成、胎土等に違いが見られ、同一地域でありながら系統の違いを感じさせる。浮線文の土器は、本遺跡では黒色系で薄手、堅緻であるのに対して、花見堂遺跡出土土器は全体的に厚手で焼成の良くないものが目立つ。胎土も本遺跡程良くなく、黄褐色系を呈するものが多い。文様構成も花見堂例はより複雑化しており、口縁内面の沈線も2本である場合が多い。ただし1点だけ（第34図10）撚糸原体RとLの差はあるが、本遺跡Ⅲb類に比定できるものがあり、焼成も良好で色調も黒褐色系を呈している。いわゆる粗製土器については、本遺跡の条痕文、花見堂遺跡の撚糸文と決定的な違いがある。このようなことから、花見堂遺跡出土土器群の方がより千網式土器に近い要素をもつことを伺うことができる。これに対して、本遺跡出土土器は、黒色系で薄手、滑沢、丁寧な製作のⅡ類～Ⅳ類土器に褐色系のⅠ類土器が混在する点や、櫛目状擦痕の粗製土器が主体を占める点等から杉田D類（杉原他1963）にその類例を求めることができる。

この両遺跡は時期的にも距離的にも近いのに関わらず、以上のような看過し難い相違が見られ、両遺跡を有機的に関連付けることは困難である。つまり異質な集団が各々残した点の遺跡であり、同一地域における縄文時代終末期の拡散した文化の状況を見ることができる。

出土した土器はすべて小破片であるため完全な器形を知ることはできないが、鉢形土器が主体を占めている。このことは一人子遺跡（馬目他1970）で大洞C<sub>2</sub>式とA式の器種構成の比較で、鉢形土器が5%から49%へ増加しているという分析と一致する。

浮線網状文系のⅠ～Ⅳ類のわずか9片の鉢形土器口縁部破片でも、小突起を持つⅠ類、波状口縁のⅡ類、平縁のⅢ、Ⅳ類と形態に差が見られる。Ⅰ類については、大形の鉢でⅡ～Ⅳ類とは色調、胎土共異なっており、花見堂的な土器である。Ⅱ、Ⅲ類の浮線部の作り方は、ネガとしての沈線を複数引くことによって浮線を陽刻する陽彫技法を基本としている。この浮線を点刻、ずらし、沈線施文時に引き寄せられてきた粘土等で連結し、さらに分岐によってより複雑な文様を構成している。連結の単位については不明であるが、Ⅲb類（第11図6）のように連結部が1段目と2段目がずれている例もある。このことから厳密な収束単位が薄れていき浮線文の構造が崩れ始めていく様相が感じられる。

本遺跡についてはこれまで浮線網状文、撚糸文が出土と紹介（増田1980、吉川1982）されて来たが、前述のように条痕文系の土器が主体を占め、ここに浮線網状文、条痕文と改めて述べておく。



第149図 縄文時代晩期～弥生時代中期遺跡分布図

縄文晩期～弥生中期遺跡一覧

- |                                    |                              |
|------------------------------------|------------------------------|
| 1 前窪遺跡(浦和市) 安行Ⅲ、浮線網状文              | 26 橋屋遺跡(花園町) 安行Ⅲ a、b         |
| 2 大間木内谷遺跡(〃) 浮線網状文                 | 27 如来堂遺跡(美里村) 大洞A～弥生初        |
| 3 吉場遺跡(〃) 浮線網状文                    | 28 村後遺跡(〃) 須和田住居             |
| 4 馬場遺跡(〃) 安行Ⅲ、大洞B-C～C              | 29 前組羽根倉遺跡(神川村) 須和田墓         |
| 5 白幡中学校庭遺跡(〃) 荒海式住居2               | 30 岩合遺跡(秩父市) 岩陰、条痕文          |
| 6 一ツ木遺跡(〃) 安行Ⅲ a                   | 31 三角穴半洞窟遺跡(皆野町) 条痕文         |
| 7 馬場小室山遺跡(〃) 安行Ⅲ住居、浮線網状文           | 32 大沼遺跡(秩父市) 条痕文、中部系土器       |
| 8 石神貝塚(川口市) 安行Ⅲ a～c、大洞B-C          | 33 柳田遺跡(〃) 集落(?)             |
| 9 精神場遺跡(〃) 安行Ⅲ b、大洞C <sub>1</sub>  | 34 下ッ原遺跡(〃) 中期中葉             |
| 10 小深作遺跡(大宮市) 安行Ⅲ a～c、住居1          | 35 花井遺跡(横瀬村) 五貫森式            |
| 11 奈良瀬戸遺跡(〃) 安行Ⅲ c、住居2             | 36 わらび沢遺跡(吉田町) 変形工字文、羽状条痕文   |
| 12 東北原遺跡(〃) 安行Ⅲ、大洞C                | 37 山田遺跡(秩父市) 安行Ⅲ、住居3         |
| 13 後谷遺跡(桶川市) 安行Ⅲ c、大洞C、前浦          | 38 安中遺跡(吉田町)                 |
| 14 高井東遺跡(〃) 安行Ⅲ a、住居               | 39 発戸遺跡(羽生市) 安行Ⅲ c           |
| 15 宮岡氷川神社前遺跡(北本市) 大洞A(?)           | 40 裏慈恩寺遺跡(岩槻市) 安行Ⅲ c、大洞B-C   |
| 16 打越遺跡(富士見市) 大洞C <sub>2</sub> ～A' | 41 真福寺遺跡(〃) 安行住居             |
| 17 日高町高麗(日高町) 千網(?)                | 42 田端前遺跡(〃) 安行Ⅲ b、c          |
| 18 花見堂遺跡(嵐山町) 千網                   | 43 諏訪山遺跡(〃) 方形周溝墓(?)         |
| 19 屋田遺跡(滑川村) 千網                    | 44 南遺跡(〃) 須和田住居              |
| 20 四十坂遺跡(岡部町) 墓                    | 45 ささら遺跡(蓮田市) 大洞A            |
| 21 上敷免遺跡(深谷市) 〃                    | 46 関山貝塚(〃) 大洞A～A'            |
| 22 飯塚、飯塚南遺跡(妻沼町) 墓、須和田住居           | 47 入郷地遺跡(白岡町) 安行Ⅲ c、大洞B-C、千網 |
| 23 三ヶ尻上古遺跡(熊谷市) 墓                  | 48 樋遣川地区(加須市) 大洞系(?)         |
| 24 池上、池上西遺跡(〃) 須和田、環濠集落            | 49 小塚遺跡(菖蒲町) 安行Ⅲ a～c         |
| 25 平戸遺跡(〃)                         | 50 地獄田遺跡(〃) 安行Ⅲ a、住居4        |
|                                    | 51 赤城遺跡(川里村) 安行Ⅲ a、b         |



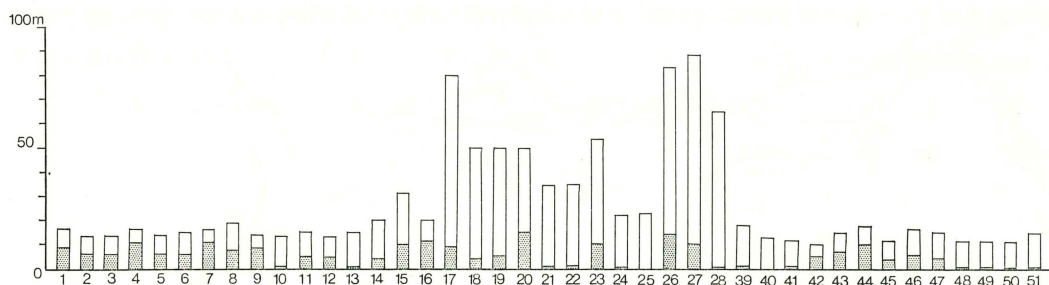


表1 遺跡の標高と沖積面との比高差（白スキとスクリーントーンを合わせた長さは標高を示し、スクリーントーンは沖積面との比高差を表わす）

V類を中心とした条痕系の土器の類例としては杉田遺跡の粗製土器2群があげられ、杉田遺跡ではこれらの土器は杉田D類に伴うとしている。この共伴例は庄ノ畑遺跡（戸沢1953）で確認されており、両遺跡の中間地帯である本遺跡でも、浮線網状文に条痕文系の土器が主体的に伴う事実がとらえられたのである。Ⅳ類の複合口縁の土器についても器形は千網式の特徴を具備しているにも関わらず、地文に撚糸文ではなく条痕文を施文している。さらにⅧ類の沈線も明瞭ではないが、あるいは稲妻形になる可能性も考えられ、条痕文系土器については杉田遺跡により近い様相を呈している。

この時期の遺跡は埼玉県でもその例は少なく、先述の花見堂遺跡の他10遺跡程が確認されている程度であり、田部井の指摘どおり（田部井1980）分布は広いがその密度は小さい。又、遺構が検出される例が少なく、前後の時期ともつながらず、時期的に孤立しているという特徴的な共通点をもっている。このことは近県においても同様な傾向にあり、千網谷戸遺跡のように後期末から弥生初頭まで継続する例（伊東、増田1977他）は多くはない。

分布図（第149図）と表1は秩父地域を除いた安行Ⅲa期から須和田期までの遺跡分布と各遺跡の標高及び沖積面との比高差を示したものである。晩期終末の遺跡は吉川の指摘どおり沖積面にはなく、すべて台地上か丘陵上に位置している。これに対して安行Ⅲa期の地獄田遺跡（註1）や赤城遺跡（元井他1983）あるいは須和田期の池上遺跡（中島他1982）等の前後の時期には現在水田となっている地域に立地する場合がある。又、沖積面との比高差は多少地形にも影響されるが、終末期は5～10mと大きな差はなく、他時期と比較して安定している。さらに、いずれも台地肩部あるいは甘粕山遺跡群のように丘陵の先端に位置し、加えて河川に面しており、台地奥部や小谷戸が複雑に入り組んだような地形にはない。このことは、低湿地や沖積地を指向しているのではなく、河川の有無を問題としているのであって、これまでも再三述べられているごとく、漁撈を意識した集落占地であると考えることが可能である。

遺跡の分布は点在している程度であるが、その中では大宮台地に多く9ヶ所を数える。特に大宮台地南端の浦和周辺ではまとまっており、白幡中校庭遺跡（青木他1977）では荒海期の住居跡が調査され、該期の数少ない遺跡検出例となっている。その他には武蔵野台地で1、比企丘陵で3、松久丘陵で1遺跡が確認されており、地図には載せていないが秩父地方でも数遺跡が知られている。

さて、本県における縄文時代終末期については、遺跡の調査例が増加しつつあるとは言え、増田が述べているとおり、その絶対数の少なさ、遺物量の少なさは否定できない。しかし、如来堂C遺

跡の調査によって四十坂遺跡出土土器と大洞A式併行期の間の一部を埋めることができ、縄文終末から弥生初頭にかけての問題について大きく前進したと言える。増田はこの如来CⅡ群土器を如来堂式として設定し、大洞A'式の新段階に位置付けており、この土器を弥生土器として扱っている。本遺跡との間には組成や文様についてもヒヤタスを感じるが、形式的には1～2型式程の差しかないであろう。この間に凸帯を持つ壺や、水神平式系の条痕文土器を保有する集団が河川沿いに出現し、その分布は正にモザイク的でさえあるが、埼玉における弥生時代の幕引きを演じるのである。

(井上尚明)

## 註

- 1 菖蒲町大字小林に所在する縄文時代後、晩期の遺跡。調査は昭和55年度に町教育委員会三ツ木貞夫氏により実施された。
- 2 群馬、長野、埼玉県の弥生時代研究者が1980年より年1回シンポジウムを開催しており、83年は群馬県の主催により、弥生初頭の土器について行われた。今年は長野県が当番県となって初期古墳を問題とする予定である。

## 引用・参考文献

- 青木義脩 他「白幡中学校校庭内遺跡発掘調査報告」浦和市遺跡調査会報告第3集 1977
- 青木義脩 他「前窪遺跡発掘調査報告」浦和市遺跡調査会報告第4集 1977
- 麻生優 他「打越遺跡」富士見市文化財調査報告第14集 富士見市教育委員会 1978
- 磯崎正彦・上原甲子郎「亀ヶ岡式文化の外殻圏における終末期の土器型式」『石器時代』第9号 1969
- 伊藤晋祐・増田修「千網谷戸遺跡発掘調査報告(概報)」桐生市文化財調査報告第2・3・4集 桐生市教育委員会 1977・1978・1980
- 金井塚良一 他「花見堂」嵐山町教育委員会 1976
- 後藤和民「原始集落研究の方法論序説」『駿台考古学論集1』 1975
- 庄野靖寿 他「関山貝塚」埼玉県埋蔵文化財発掘調査報告書第3集 埼玉県教育委員会 1974
- 蘭田芳雄「桐生市千網谷戸遺跡調査報告」桐生女子高等学校 1965
- 蘭田芳雄「群馬県桐生市千網谷戸C-E S地点の調査」両毛考古学会 1972
- 杉原荘介・戸沢充則「神奈川県杉田遺跡および桂台遺跡の研究」『考古学集刊』2-1 1963
- 田部井功「関東地方晩期縄文式土器の研究」『古代探叢』早稲田大学出版部 1980
- 中村五郎「畿内第Ⅰ様式に並行する東日本の土器」1982
- 永峯光一「氷遺跡の調査と研究」『石器時代』第9号 1969
- 増田逸郎 他「甘粕山」埼玉県遺跡発掘調査報告書第30集 埼玉県教育委員会 1980
- 馬目順一 他「一人子遺跡の研究」『南奥考古学研究叢書Ⅰ』1970
- 元井茂 他「赤城遺跡」川里村教育委員会 1983
- 山内清男「所謂亀ヶ岡式土器の分布と縄紋式土器の終末」『考古学』1-3 1930
- 吉川国男 他「埼玉県土器集成4」埼玉考古学会 1976
- 吉川国男「西関東における弥生文化の波及について」『埼玉県史研究』第9号 1982
- 『東日本における黎明期の弥生土器』第4回埼玉・長野・群馬三県弥生時代シンポジウム資料 1983

(註2)